

このように揺り動かされない御国を受けるのですから、私たちは感謝しようではありませんか。
感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝をささげようではありませんか。
(ヘブル人への手紙 12章 28節/新改訳 2017)

序. 新型コロナウイルスの世界的流行(パンデミック)で、私たちの信仰生活・教会生活も制約を受けています。そこで、**<神に喜ばれる礼拝>**について聖書の教えに耳を傾けましょう。この説教の結論を先に申せば、**<感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝を>**(ヘブル 12:28)とは、「**信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないで**」(ヘブル 12:2a)礼拝・奉仕の人生を全うすることです。

ヘブル人への手紙の緒論(『注解・索引・チェーン式引照付聖書』いのちのことば社、1981年他を参考)
■著者/不明。■執筆年代/西暦65年から69年頃。■執筆場所/イタリア(ローマ)以外(13:24)。■宛先/引用の旧約聖書がギリシャ語の70人訳を用いているので、おそらくイタリアに住むユダヤ人キリスト者たち。■執筆事情/受取人はキリスト者になってある程度の歳月を経たが、その信仰はあまり成長していない(5:12)。入信当初は迫害に耐えていたが(10:32)、信仰を捨てユダヤ教に逆戻りする者もいた(6:5,6)。そこで著者は彼らにキリストの救いに留まるように励まし(10:35)、勧めた(13:22)。■特色/イエス・キリストの救いが旧約聖書の預言の成就であることを、旧約聖書の聖句、制度、信仰の勇者たちの事例等を挙げて説いている。■主題/「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。」(12:2a)
【補足】「ヘブル人」とは(創 14:13他)「ユ(ウ)フラテ川の対岸からの人」(ヨシヤ 24:23)の発音が変化した言葉。彼らの使う言葉が「ヘブル語」。「ユダヤ人」とはユダの民族・王国に属していた人という意味(Ⅱ列 16:6)。「ユダヤ人」も「ヘブル人」も民族の出身地を意味する。これに対して「イスラエル」とは「神は戦う/神と戦う」の意味で(創 32:28)で、宗教的な意味を含む。私たちは「ヘブル人」ではないが、**<あわれみの器>**(ロマ 9:24)とされた者。よって「ヘブル人への手紙」はユダヤ人キリスト者だけでなく、私たち異邦人キリスト者にも適用される。(ロマ 11:22-24他)

ヘブル人への手紙の筆者が(今朝の説教箇所)12章 25-29節で読者に伝えている内容 **<あなたがたは語っておられる方を拒まないように気をつけなさい>**(25節a)という警告と、**<私たちは感謝しようではありませんか。感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝をささげようではありませんか。>**(28節)という奨励。**【ここで使われている「か」の解説⇒**ヘブル人への手紙を**【新改訳 2017】**(2017年発行)で、**【新改訳改訂第3版】**と比べると「か」の「訳語が多く(17回が24回に)、原文の語彙(ごい)を理解するために役立つ。ご存じのとおり「か」とは、①話し手の疑念を表す**係助詞**として使う場合と、②話し手が聞き手に行動をうながす**終助詞**として使う。≪『広辞苑(第5版)』(例えばヘブル 1:5, 13の「か」は終助詞。)原文(校訂本)にはギリシャ語文法上、疑問符はないが、英語の翻訳では疑問符?が付く。今朝のヘブル 12:28(新改訳 2017)では「か」が2回強調され(新改訳 3版までは1回のみ)いずれも終助詞。

警告と奨励 **<あのとき>**(26節前半)とは、神がシナイ山においてご自身を顕され、**<山全体が激しく震え>**(出 19:18)、モーセを通して十戒に代表される律法を授かった出来事。**<もう一度>**(27節)とはハガイ書 2章 6節の預言のとおり、やがて神の審判が生きている者たち、死んだ者たちに下される時が来ること。(此処に記されていないが、その時、終末におけるキリストの再臨、死者の復活、最後の審判、新天地が到来する。)よって26節は、不信者にとっては永遠の滅びの警告、キリスト者にとっては救いの完成への待望。ヘブル人への手紙の著者は、誘惑、試練にあるキリスト者を励ましている。**<このように揺り動かされない御国を受けるのですから、私たちは感謝しようではありませんか。感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝をささげようではありませんか。>**(28節) **【礼拝と奉仕について】**このヘブル 12章 28節で用いる、礼拝を表すギリシャ語は「プロスクネオー」(語源は”前にひざまずく”/ヨハ

ネ 4:23 他)ではなく、「ラトレイア」(”奉仕する”/ヨハネ 16:2 他)。そのため、これまでの【新改訳改訂第3版】は<神に喜ばれるように奉仕を>【口語訳】は<神に喜ばれるように、仕えて>【新共同訳】は<神に喜ばれるように仕えて>【文語訳】は<御心にかなふ奉仕(つとめ)を>と、すべて<奉仕>と訳出。ところが、【新改訳 2017】では「礼拝」と訳出。(例外として【詳訳聖書】は、ヘブル 12:28<神に喜ばれる奉仕<神に受け入れられる礼拝>を>と意識。) ■「プロスクネオー」と「ラトレイア」の用い方で顕著な箇所は⇒悪魔が主イエスにくもしひれ伏して私を拝む(ギリシャ語でプロスクネオー)なら>と誘惑した時、主イエスが<下がれ、サタン。『あなたの神である主を礼拝(ギリシャ語でプロスクネオー)しなさい。主のみ仕えなさい(ギリシャ語でラトレイア)』と書いてある。』(マタイ 4:9,10)と命じて悪魔を退けたこと。 ■主イエスによれば礼拝と奉仕は車の両輪、表裏一体。ローマ 12 章 1 節でも、”ラトレイア”を<礼拝>と訳す。 ■礼拝が形式化、形骸化しないため、英語圏のプロテスタント教会の日曜礼拝は”モーニング・サービス”。私たちが「プロスクネオー」、「ラトレイア」両方の姿勢で礼拝しよう。

適用 ■”ウィズコロナ”(コロナと共に)、“アフターコロナ”(コロナ後)の新語に表されているように、この度の新型コロナウイルスで、私たちの礼拝の方法や仕組みも、変化を強いられている。インターネットを使ったオンライン礼拝などは、今後も高齢化、遠隔地の方々、多忙な社会では有効。大切なことは、どこで礼拝するにせよ、<信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないで>(ヘブル 12:2a)、<感謝しつつ、敬虔と恐れをもって、神に喜ばれる礼拝を>【事例】<信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないで>(ヘブル 12:2a)に関連する記事は、<お願いします。イエスにお目にかかりたいのです。>(ヨハネ 12:21)の祈願。故エバ・グラス師(北海道聖書学院初代舎監。品田与志夫師と共に札幌聖書キリスト教会の開拓伝道を)は、礼拝奉仕者はこの聖句を説教壇の内側に書いて留意せよと神学生たちにいつも教えた。「御顔を見ぬとき すべては意味なし、香りのよき花 声よき小鳥も、嗚呼されどわが慕う 主いまし給えば 師走を五月となどかは区別せん」(作詞者は”アメージンググレース”のジョン・ニュートン、聖歌 279) ■会堂における礼拝や奉仕はもとより、信仰生涯の基本はすべて、<『イエスは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰する>こと(ピリピ 2:11b、マタイ 3:17、ルカ 3:22 他) ■主イエスの絵画、像等を礼拝の対象とするのは間違い。生ける主イエスを待ち望む礼拝を。 ■旧新約聖書の御言葉を通して働く聖霊による、人格的な交わりが健全な礼拝と奉仕へ。 ■事例の紹介。

【補足】歴史におけるパンデミック(感染症や伝染病の世界的流行)について。 主イエスの警告。<大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起り、恐ろしい光景や天からの大きなしるしが現れます。(ルカ 21:11) ■天然痘、ペスト(黒死病)、新型インフルエンザ、エイズ、サーズ(重症急性呼吸器症候群)、結核、マラリア、新型コロナウイルスなどに見るとおり、聖書はパンデミックを予告している。 ■キリスト教会の歴史では、紀元 3 世紀の中頃、疫病が古代ローマ世界を襲った時、カルタゴのキプリアヌス司教が「死を免れないことについて」説教し、この災禍にあっては兄弟姉妹たちを助けるのみならず、未信者をも助けて善を為すように強く勧めていたことから、この疫病は“キプリアヌスの疫病”と名付けられた。また、宗教改革期の 14 世紀中頃、黒死病(ペスト)がアジア、ヨーロッパを襲った時、マルチン・ルターは避難せず、町の病人や教会員たちをケアするために残った。(東京基督教大学発行『日本宣教ニュース 18 号』より。) ■私たちが所属する地域のキリスト教会内での祈り会や小グループの祈り会、そして家庭礼拝などで、身近な医療従事者のためにもお祈りを。 ■新型コロナウイルスへの対応などキリスト教会関係の情報は、私たちが加盟している日本福音キリスト教会連合(JECA)、日本福音同盟(JEA)の神学委員会発行「心をつなげて福音の信仰のために—新型コロナウイルス時代を生きる—」(2020/5)、日本福音同盟が加盟している世界福音同盟(WEA)等のニュースレターやホームページ等から得ることができます。 ■私たちキリスト者は、地震、飢饉、疫病などの災害時においても、それぞれの立場や社会的責任において、キリストの証し人としての務め(ルカ 21:13)を果たせるように。お互いのために、とりなし祈り続けましょう。(上記の下線項目をインターネットやスマホに入力して検索すれば読むことができます。)